

# 「若きアルキメデス」に見る ハックスレーの扱い方

桑 原 加 代 子

Aldous Huxleyが、作品の中で描く人物の大部分は、欠点や弱点を持っている。傑作Point Counter Pointや、近未来小説、あるいはS.F.小説としても広く読まれているBrave New Worldなどの長編小説に、その特徴は顕著に表われている。また、推理小説としても十分味わえる“The Gioconda Smile”や、その他の短編においても同様である。理性と感情のバランスのとれていない人間、鼻持ちならない俗物達、傲慢な男や、虚栄心を剥き出しにした女。自分の愚かさに気付かず、右往左往している男や女などで、Huxleyの作品は溢れている。Huxleyは、こういった人々の弱点を冷ややかな眼と、突き放した態度で見つめ、指摘し、攻撃している。そして、これがHuxleyの得意とするところであり、彼の作品の特徴とも言われている。

Huxleyの短編の一つに、“Young Archimedes”がある。これは、そのタイトルからも推測できるように、一人の天才児の物語でありイタリアの町が舞台となっている。Huxleyは各国を旅行し、数多くの旅行記も手がけ、長編、短編を問わず、その風景描写には定評がある。この物語でも、美しい風景描写は見どころの一つとなっている。が、同時に、この物語はHuxleyの他の作品と少々趣きが異なっている事も見のがせない。というのは、Huxleyが、その大部分の作品で見せたものとは違った一面を読者に見せているからである。それは、“Young Archimedes”の主人公Guidoに対する筆使いである。あの冷たく、突き放した態度が影を潜めているのである。

そこで本稿では、Huxleyのこの別の一面にスポットをあてる。Huxleyが、この物語をどのような姿勢で書いているか、どのように主人公Guidoを扱っているか、何故、“Young Archimedes”が彼の他の作品とは違った筆致となっているかを、その刻明で美しい風景描写と関連させながら探っていく。

物語は、語り手「私」が借りることにした別荘からの風景描写で始まっている。この別荘は、イタリアのアルノ河を臨む丘の上に立ち、その眺めは、四季折々の美しさを持ち、また同じ季節でも、あるいは一日の内でも変化することさえある。丁度、違った美しさの

中を毎日旅している印象を与える。冒頭、約4ページに渡って繰り返されているこの風景描写の中で注目すべき点の一つは、別荘から見た空、山々、イタリアの町、様々な建造物の描写におけるその色彩の美しさと豊かさである。

別荘からの眺めは、春夏秋冬と、それぞれ季節毎に違った美しさを持っている。秋の日の様子は、“．．． all the valleys were filled with mist and the crests of Apennines rose darkly out of a flat white lake” (p.271)<sup>注1)</sup>と説明されている。“mist”から「白い」霧を、“darkly”から「黒く」そびえたつ山を連想することは容易である。「白い」霧、「白い」湖面、「真黒な」アペニン山脈の峰々と、「白」と「黒」の二色が巧みに用いられている。

「白」と「黒」の二色の配色は、冬の景色の描写にも見られる。冬になると、その季節にふさわしく、あたりは暗くどんよりとし、別荘はすっかり霧に包まれる。

．．． we were enveloped in a soft vapour in which the mist-coloured olive trees. . . disappeared. . . and the only firm and definite things. . . were the two tall black cypresses. . . Black, sharp, and solid, they stood there. . . and beyond them there was only pale cloud and round them only the cloudy olive trees. (p.272)

あたり一面「白い」霧にすっぽり包み込まれ、オリーブの木も「白っぽく」霞み、空には「白っぽい」雲が浮かんでいる。そんな中で唯一はっきりとした形を持っているのは、「真黒」な2本の糸スギの木である。黒々と、どっしりと立っている糸スギの木の勇壮さ、雄大さ、そして一面の霧の様子が「白」と「黒」の二色で示されている。

真夏の雷雨になりそうな気配の描写にも、「白」と「黒」のコントラストが使われている。“There were days in summer—time, days of impending thunder when, bright and sunlit against huge bellying masses of black and purple, the hills and the white houses shone as it were precariously, in a dying splendour. . . ” (p.273). つい先ほどまでは、明るい太陽の光に照らされ、「白っぽく」光っていた家々の上に「真黒な」雲が立ちこめ、雷が鳴り響き、今まさに激しい雨が降ってくる間際であることを暗示する描写である。

春と秋の空、山々の様子は、非常に詳しく説明されている。

．．． there were days of spring and autumn, days unchangingly cloudless. . . made various by the huge floating shapes of vapour that, snowy above the far-away snow-capped mountains, gradually unfolded, against the pale bright blue, enormous heroic gestures. And in the height of the sky the bellying

draperies, the swans, the aerial marbles. . . . drifted sleeping along the wind, changing form as they moved. (p.272)

ここでは、直接“white”という言葉は用いられてはいない。しかし、「白」を連想させる様々な言葉で、空の様子が描かれている。“floating shapes of vapour”, “snow-capped mountains”は、それぞれ、「白い」浮雲、「白い」雪を頂く山々を表わしている。さらに、その白い雲の形を白鳥や大理石像に喩えるに至っては、雲の白さはもとより、雲の形の優雅さ、優美さをも読者に訴えるに十分の効果を持っていると言える。

霧に包まれた春、秋、冬、そして夏の雷雨前の様子は、「白い」霧、「白い」雲、「黒い」木々、「真黒な」雲という様に、「白」と「黒」のコントラストが有効的に用いられていたが、霧のない春や秋の日々、また、太陽の照りつける夏の景色は少し違った描写になっている。

春や秋の一日、太陽が見え隠れするそのあい間には、町並、建物が次の様に見える。

. . . like an immense fretted jewel between the hills, it [the town] would grow as though by its own light. . . . One saw. . . the canopied tower of the Signoria. . . . like small treasures carved out of precious stones. For a moment only, and then their light would fade away once more, and the travelling beam would pick out, among the indigo hills beyond, a single golden crest. (p.272)

“jewel”, “treasure”, “precious stone”は、いずれも宝石を示す言葉である。教会のドーム、鐘楼、尖塔、天蓋のある塔などが、太陽の光を浴びて、きらきかと「赤」「青」「黄」「緑」「金」「銀」といったまるで宝石を思わせるような豊かな輝きを放って輝いている。華麗で豪華、きらびやかなイメージを持つ言葉を駆使して、太陽に輝くその美しい風景を描いている。

夏、太陽が空高く登り、照り始めると、丘は変化を見せる。“... now there were ranges behind ranges of hills, graduated tone after tone from brown, or grey, or a green gold to far-away blue” (p.273). 山の斜面は、「茶色」、「灰色」、「緑がかった黄金色」、「青」といった幾重にも重なった山並となる。さらに、夕方、太陽が地平線の下に沈んだ後、その景色は別の変化を見せる。

. . . the further hills flushed in its warm light, till their illumined flanks were the colour of tawny roses; but the valleys were already filled with blue mist of evening. . . . The mountains faded and fused together again into a flat painting of mountains against the pale evening sky. (p.274)

「白っぽい」夕方の空を背景に、山の斜面は「バラ色の」夕日に輝き、「青い」夕霧が立ちこめている。この様に別荘からの景色は一日の内でも変化し、その魅力は失われることはない。

以上の様に、季節、時間によって変化する別荘からの風景が、実に詳しく、かつ美しく描写されている。その豊かで美しい色彩描写は、読者の視覚に訴える。読者は、「白」と「黒」の二色の配色で描かれた風景を、あるいは、様々な色彩で色どられた景色を、目の前に思い浮かべ、その美しい風景を提供してくれる別荘に、ある種の魅力を感じるのではないだろうか。

さて、物語の語り手「私」が、この別荘に魅かれた理由は、その美しい景色の他にもう一つある。それは、別荘の近くに住む一人の少年Guidoとの出会いである。数ページに渡る美しい風景描写の後、Guido、彼の父Carlo、別荘の持ち主であるBondi夫妻、「私」の息子Robinの登場となる。美しく、色あざやかに風景描写をしてきたHuxleyが、これら登場人物を、特にGuidoを、どのように扱っているかが、ここでの焦点である。

Bondi夫人は、その愚行、虚栄心等がHuxleyの攻撃の対象となっている。彼女は、ありあまるバイタリティーと、“all the skill of a born comedian” (p.275) を持った女性である。そのバイタリティーは、“Her vitality. . . would have supplied a whole town with electric light. . . . Signora Bondi got rid of her superfluous energy. . . by ‘doing in’ her tenants” (p.276)と説明されている様に、並はずれたものであり、その発散方法は傍迷惑である。この「借家人をやっつける」事は、“she enjoys it”(p.279)という夫Bondi氏の言葉から彼女の一種の趣味であると推測できる。何とも悪趣味だが、本人はそんな事には全く無頓着である。

Bondi夫人の余ったエネルギー発散の対象にされたのが、語り手「私」である。彼女の「借家人」になる「私」に、彼女は別荘の案内をする。“... she. . . with a lavish display of charm, with irresistible rollings of the eyes, expatiated on the merits of the place, sang the praises of the electric pump, glorified the bathroom” (p.276). 意気揚々と、かなり大袈裟に別荘の環境を説明し、電気ポンプが設備されていることを誇らしそうに話す彼女の姿が表われている。「私」が、専門家を読んで別荘の状態を調査させたいと言うと、“not to waste [your] money unnecessarily in doing anything so superfluous”(p.276)と止めさせようと一生懸命である。そして、“we are honest people. I wouldn’t dream of letting you the house except in perfect condition. Have confidence”(p.276)と、自分はとても人を騙せるような人間ではないとまで言っている。口八丁手八丁、かなりの自信家と言える。

ところが、熱心に薦め賛美した電気ポンプは作動しない。別荘を借りた日、電気ポンプのスイッチを入れたところポンプは動かない。彼女の言う事は信用ならないと考え、早速苦情を言おうとする「私」の前に新たな問題が持ち上る。即ち、彼女との連絡は手紙によるのが唯一の方法だという事が判る。苦情にせよ、希望にせよ、とにかく、いちいち手紙を書き郵便局まで持って行かなければならない。口で言えば簡単で、しかもただで済むものが、この方法だとかなりの郵便代、時間、そして手間がかかるというわけである。彼女の中には、こんなに面倒で手間がかかるのならと、交渉相手があきらめるに違いないという思惑があるのだろう。何とも狡猾な女性である。

「私」は、彼女と何回か手紙で交渉する破目になる。私の手紙に対して答える、彼女の言い訳の手紙がまた実に、巧妙かつ大胆である。

. . . the pump didn't work, as the cisterns were empty, owing to the long drought. . . . bath water had not been guaranteed in the contract; and if [you] wanted it, why hadn't [you] had the pump looked at before [you] took the house?. . . the Signora couldn't continue to have communications with people who wrote so rudely to [me] .(p.278)

別荘の案内の時、「私」が専門家に調べさせたいと言ったのを止めさせたのは、他ならぬ彼女自身である。それが、そんな事はなかったかの様に、ぬけぬけとした態度をとり怒っている。“we are honest people. . . Have confidence”(p.276)の言葉をすっかり忘れてしまった様な厚顔無知ぶりである。後日、やっと会うことができた時、“why *did* you write me such dreadfully rude letters?. . . How *could* you? To a lady.”(p.280)というのが、彼女の開口一番の科白である。自分は少しも悪くないという自己中心的な態度である。あれこれと理屈をつけて相手につっかかり、他人の気持ちなど構わず、自分勝手に行動している女性の姿が浮きぼりにされている。

Bondi夫人は、主人公Guidoにひどく執着している。彼を何とかして養子にしたいと考え何かと世話をやく。このGuidoへの干渉の中でBondi夫人は、その自己中心的な性格、さらには、Huxleyの攻撃の恰好の餌食になるような愚かな振舞いをしている。

Bondi夫人のGuidoへの思い入れは、ことその他深い。彼女は、実に熱心に養子獲得作戦を展開していく。“Such a beautiful, beautiful child!. . . It's really a waste that he should belong to peasants who can't afford to dress him properly”(p.283)と「私」に語り、農夫ふぜいの子供にしておくには、もったいない、Guidoにはもっと金持ちの親が必要だと言わんばかりである。職業への偏見を垣間見せ、同時に暗黙の内に自分をアピールしている。狡猾ともとれるやり方である。

Bondi夫人は、「もし、Guidoを養子にすることができたら．．．」と、彼への夢をとうとうと、まくし立てる。

．．． I should put him into black velvet ; or little white knickers and a white knitted silk jersey with a red line at the collar and cuffs ; or perhaps a white sailor suit would be pretty. And in winter a little fur coat, with a squirrel skin cap, and possibly Russian boots. . . And I'd let his hair grow, like a page's and have it just curled up a little at the tips. And a straight fringe across his forehead.(pp.283-284)

まさに、小公子さながらの姿である。彼女が、Guidoに対して抱いているもの、それは、“Every one would turn round and stare after us if I took him out with me in Via Tornabuoni” (p.284)という彼女の一言に凝縮されている。要するに、彼女にとってGuidoは、一人の男の子ではなく“a clock-work doll”(p.284)か、でなければ“performing monkey”(p.284)に過ぎない。外見ばかりに捉われている、外見的なものしか見えない、愚かな女性と言える。

外見的なものに捉われている、このBondi夫人の傾向は、夫Bondi氏に対しても、同様である。“In his black tie he wore a very large diamond”(p.278)というBondi氏の描写は見のがすことができない。夫人の目に、この大きなダイヤモンドはどのように写ったのだろうか。黒いネクタイに輝く大きなダイヤモンドに彼女はすっかり心を奪われていたのである。“．．． that was what Signora Bondi had found so attractive about him” (p.278). 高価できらびやかな、そして派手なものが好きな見栄張りの女性と言えそうである。

このように、Bondi夫人は、自己中心的で見栄張りの性格が攻撃されているが、彼女の夫の方はどのような男性として描かれているだろうか。Bondi氏は、あまり登場しない。唯一といっていいのが、例の電気ポンプ事件の時である。自分の非を認めず、弁解をし理屈をつけ相手のせいにしようとするBondi夫人に対して、Bondi氏は直接何も言わない。否、言えない。その妻の目を盗むかのように、妻への不満を「私」に訴え、要領を得ないながら、口ごもり何度も「私」に、“I want to apologize”(p.279)と言うのが精一杯である。妻のやる事に内心はらはらしながら、また困ったものだと思いつつ、表だって妻をしかる事も、意見する事もできない、だらしない小心ものの老人として描かれている。

次に、主人公Guidoに対するHuxleyの扱い方がどのようなものかを見ていく。彼の外見、特に顔付きは、次の様に説明されている。

They were large eyes, set far apart and, what was strange in a dark-haired Italian child, of a luminous pale blue-grey colour. . . When he was playing,

when he talked or laughed, they lit up ; and the surface of those clear, pale lakes of thought seemed, as it were, to be shaken into brilliant sun-flashing ripples. Above those eyes was a beautiful forehead, high and steep and domed in a curve that was like the subtle curve of a rose petal.(pp.282—283)

ここで注目すべき点は、彼の目鼻立ち、表情を表わすのに、色彩による表現と美しいイメージの言葉が使われていることである。「黒い」髪、「青灰色の」目、「バラの花びらのような」額の線、輝きを表す“luminous”, “lit up”, “brilliant”, “sun-flashing”などである。これらから、Guidoは、実に生き生きとした表情豊かな男の子であることが伺える。

この物語には、Guidoともう一人、同年代の「私」の息子Robinが登場する。二人は一緒にいる事が多い。そこで二人の男の子の行動、態度を対比させながら、その描かれ方を見してみる。二人の特徴が詳しく示されている一枚のスナップ写真がある。

Guido sits almost facing the camera, but looking a little to one side and downwards ; his hands are crossed in his lap and his expression, his attitude are thoughtful, grave, and meditative. . . . And by his side sits little Robin, turning to look up at him, his face half averted from the camera, but the curve of his cheek showing that he is laughing ; one little raised hand is caught at the top of a gesture, the other clutches at Guido's sleeve, as though he were urging him to come away and play. And the legs dangling from the parapet have been seen by the blinking instrument in the midst of an impatient wriggle ; he is on the point of slipping down and running off to play hide-and seek in the garden. (p.283)

対照的な二人のポーズである。Guidoの描写には、少し恥ずかしそうに、うつむき加減で礼儀正しく手をきちんと膝の上に置き、落ち着いた、思慮深い、利発そうな男の子の様子がよく表われている。一方、Robinの方には、落ち着きがなく、写真などとられたくない、早く遊びたいといった様子がありありと出ており、少々だらしない少年である事を示している。

二人が、極めて対照的なのは、音楽、数学に対する興味の示し方にも表われている。音楽の好みは、Guidoが、“the genuine stuff”(p.289)を好むのに対して、Robinは、“the cheerful tunes”(p.289)が大好きで、“to whose sharp rhythms our little Robin loved to go stamping round and round the room, pretending that he was a whole regiment of soldiers. . . .”(p.289)と、バタバタと動き回っている。初めて蓄音機を見た時、Guidoは、“. . . came to a halt in front of the gramophone and stood there, motionless,

listening”(p.289)といった態度をとり、“His pale blue-grey eyes opened themselves wide” (p.289)と、その物珍しい機械に驚き、同時に関心を示している。片や、Robinは、“. . . had also taken up his stand in front of the gramophone. . . . But after a minute or so he became bored” (p. 290) といった有様で、「遊ぼうよ、遊ぼうよ」と兵隊ごっこをしようとGuidoを誘っている。遊びたくて仕方のないRobinに対して、Guidoは、“. . . leaned a little closer to the instrument, as though to make up by yet intenser listening for what the interruption had caused him to miss”(p.290)と、聞き耳を立てている。そして、音楽が終わると、“The child poured out his questions”(p.291)といった態度を示す。水が流れる如く、次から次へと彼の口から様々な質問が、飛び出してくるのであろう。「私」の答えに対しては、“Guido listened to me very gravely, nodding from time to time”(p.291)という反応を示す。「私」は、“. . . he understood perfectly well everything I was saying” (p.291)という印象を持つ。音楽に対する深い興味と鋭い感性、十分な理解力を持っている事は明白である。わずか6歳の男の子が、大人の「私」をして全て完璧に理解していると思わせるのである。

ところが、Guidoには音楽とは別のさらにすぐれた才能がある事が判る。GuidoとRobinが庭で遊んでいる時である。その時の二人の様子は、“Kneeling on the floor, he [Guido] was drawing with the point of his blackened stick on the flagstone. And Robin, kneeling imitatively beside him was growing. . . rather impatient with this very slow game. . . . Pensively frowning, he [Guido] went on with his diagram”(p.297)と極めて対照的に描かれている。Guidoは、ピタゴラスの定理を証明しようと三角形や四角形を描き、Robinが何度呼びかけても一心にその作業を続けている。一方Robinの方は、訳のわからない三角形の絵を描いて、ちっとも相手にしてくれないGuidoに腹を立て、「汽車の絵を描いて」とだだをこねて泣き叫んでいる。Guidoは、モーツアルトの再来ではなく、真の才能は数学の分野にあり、“little Archimedes”だったのである。

Guidoが、“little Archimedes”と確信した「私」は、目の前で遊んでいる2人の男の子を眺めながら、人間について考え、ある感慨を抱く。“This child. . . . when he grows up, will be to me, intellectually, what a man is to a dog.. . . The young Archimedes seemed to be just as happy as the little tow-headed barbarian”(pp.299--301). Robinを「野蛮人」、自分は知性の面においては、犬程度にしか価値しないと考えている。Guidoの天分を認め、才能を高く評価し全く脱帽している。Guidoの未来に大きな希望を持っていると言える。

「私」が認めているのは、Guidoの蓄音機を前にした時見せた音楽的才能、ピタゴラスの定理を証明した時の数学の天分だけではない。彼の人間的長所にも目を向け、認めている。RobinとGuidoの二人が遊んでいる様子から、とくにGuidoのRobinへの接し方を見て、「私」



は次の様な感想を持つ。

. . . Guido took no undue advantage of his superior intelligence and strength. I have never seen a child more patient, tolerant, and untyrannical. He never laughed at Robin for his clumsy efforts to imitate his own prodigious feats ; he did not tease or bully, but helped his small companion when he was in difficulties and explained when he could not understand.(p.281)

息子Robinの真似を“clumsy efforts”と言っているのに対してGuidoへの記述には辛辣さは見られない。むしろ、その長所が際立ち彼の良い部分が強調される結果となっている。

このように、天才の卵としての豊かな才能、認め得る長所を持っているGuidoには、もう一つの面がある。それは、6歳の子供としての子供らしい一面である。ついさっきまで、ピタゴラスの定理の証明に忙しかったGuidoが、今度はRobinと汽車ごっこをしている。“Now, tooting indefatigably along imaginary rails, he was perfectly content to shuffle backwards and forwards among the flower-beds, between the pillars of the loggia, in and out of the dark tunnels of the laurel tree”(p.301). 子供らしい遊びに興じ、子供らしく実にのびやかに楽しそうに無邪気に遊んでいるGuidoの姿である。Guidoは、決して頭でっかちの子供ではない。天分と同時に、子供らしさをも合わせ持ったバランスのとれた子供だという事を、読者に示すHuxleyの配慮ではないだろうか。

「私」が、息子Robinの健康のため、スイスで2か月間の休暇を過ごしている間に、執拗なBondi夫人の攻撃に屈し切れず、父Carloは、Guidoを手放してしまう。そして、父に見捨てられ「私」とも連絡のとれないGuidoは、完全に一人ぼっちになったと感じて、自らの命を断つ。Guidoの死に関して、彼の周りの人々がどのような態度をとっているか、その描かれ方に注目する。

Guido獲得のためBondi夫人がCarlo一家に加えた圧力は、かなりのものである。100年以上もBondi家の借地に住んでいるCarlo一家に対して立ちのきを要求したのである。出ていけば、明日の生活にも窮することは明らかである。その事を十分知っているBondi夫人がCarloに出した条件は、“. . . he [Carlo] could stay if he let have the child” (p.306) というものだった。実に卑劣なやり方である。来る日も来る日も、Bondi夫人の攻撃に悩まされ、ついにCarloは陥落する。やっと手元においたGuidoを彼女は、あちこち連れ回し、いやがるピアノのレッスンをさせ、好きな数学の勉強はさせない。全て、彼女の見栄、独断からの行為である。家に帰りたいというGuidoに対しては、色々と言いつつ準備している。

. . . she put him off with promises and excuses and downright lies. She told

この物語が、実に美しい、色彩豊かな風景描写で始まっている事は、前に述べたが、最後もまた美しい情景で終わっている。

It was a day of floating clouds——great shapes, white, golden, and grey ; and between them patches of a thin, transparent blue. . . . On the innumerable brown and rosy roofs of the city the afternoon sunlit lay softly, sumptuously, and the towers were as though varnished and enamelled with an old gold.(p.310)

これは、Guidoの墓からの帰り道、丘の上から谷を見下ろした時の光景である。「私」とCarloは、丘の上に立ち、幼くして逝ったGuidoへの思いを抱きながら、「白」「青」「金」といった美しい色彩で色どられたこの景色を眺めている。

Huxleyの作品には、あまり子供は登場しないというのが、一般的評価である。従って、子供が主人公の“*Young Archimedes*”では、主人公Guidoを、いつもの様に皮肉な目で眺め痛烈に攻撃したり、死を描く場合も残酷に扱わないという理屈が成り立ちそうである。しかし、Huxleyの場合、その様な事はない。というのは、例えば、*Point Counter Point*では、Philという少年が登場するが、その肉体と精神のアンバランスぶりは、嘲笑の的であり、さらに彼の死の描写は、実に残酷で、思わず目をそむけたくなる程である。<sup>注2)</sup> また、Philを失った父親の悲しみは、さほど描かれていない。

ところが、この物語ではGuidoに対する辛辣な筆使いが影を潜め、優しく見守っているHuxleyの姿が感じられる。何故、Guidoに対しては、このような扱い方をしているのだろうか。それは、あり余るGuidoの才能を認め、彼が天才になり得る可能性を持っていると確信したからである。そして、その死に対して、心から深い同情を示し、憐憫の情を感じているからであろう。<sup>注3)</sup> 風景描写の美しさ、主人公への暖かい眼差しと思いに溢れた“*Young Archimedes*”は、Huxleyのもう一つの好編と言える。

〔注〕

- 1) “*Young Archimedes*” from *The Gioconda Smile and other Stories* (London, Triad Panther, 1984), p.271. 以下、本文中の引用は全てこのテキストからであり、ページ数のみを示す。
- 2) *Point Counter Point* (London, Penguin Books, 1974). 35章を参照。
- 3) *Aldous Huxley : A Critical Study* by L. Brander (London, Rupert Hart-Davis, 1969). Branderは、この中で、“*Young Archimedes*”に関して、“This story is touched with pity”(p.51)と述べている。